

保育内容（健康）における情報機器を用いた

講義展開についての一考察

—視聴覚教材の使用を中心にして—

石川 拓次

要旨

【目的】保育内容（健康）における視聴覚教材の使用を中心とした情報機器を用いた講義展開について、受講生への質問紙調査や授業のリフレクションシートを中心に検討し、講義展開の有用性について考察したので報告する。【方法】対象は、幼稚園教諭免許および保育士証の取得を目指している専攻の学生 57 名である。方法は、50 分間の視聴覚教材を視聴した後、リフレクションシートおよび自作式の質問紙調査を記入させた。質問紙調査は 5 件法の単一回答とした。【結果】動詞・形容詞調査の結果は、「明るい」、「かっこいい」、「すごい」という肯定的な意見が多かった。また、「感動した」「元気が出た」「ためになった」「勇気が出来た」といった言葉にも肯定的な意見が多くみられた。名詞調査の結果は、「生きること」や「生命」のことについては肯定的な意見が多かった。さらに、「夢の実現」、「将来について」も肯定的な意見が 8 割を超えていた。【結語】視聴覚教材を用いた「生きる」をテーマにした本講義の展開は、保育内容（健康）において重要な自己の健康観について深く考察することが可能となり、保育者としての力量形成に寄与するものと考えられる。

キーワード

保育者 生命 健康観 視聴覚教材

1. はじめに

世界保健機関 (World Health Organization, 以下 WHO) は「健康」を「Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity. (病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること)」[日本 WHO 協会, 2010] と定義している。WHO 憲章の前文には、全世界の人々が最高水準の健康を享受することは基本的人権の一つと記されており、幼児から高齢者にいたるまで保障されるべきものであると考えられている。

幼児における健康は守られるものであり、一方でこれからの人生を歩む上での「生きる

力」を培うために自らが進んで会得していく必要性があるものである。

幼稚園教育要領 [文部科学省, 2017]、保育所保育指針 [大場, 2008] および幼保連携型認定こども園教育・保育要領 [厚生労働省, 2017] の保育内容の教育には、「健康・人間関係・言葉・環境・表現」の 5 つの領域が設けられている。領域とは、心情、意欲、態度を身につけていくための活動や体験のことである。これらは生きる力へと繋がり、生活の基礎となるべきものである。

保育者はこの 5 つの領域に渡って幼児の活動や体験を援助することとなる。この 5 つの領域にはねらいと内容がそれぞれ示されている。ねらいとは、子どもが身につけることが

望まれる心情、意欲、態度などの事柄のことであり、一方で、内容は、保育者が援助して、子どもが環境に関わって経験する事項であり、また、子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助ということが出来る。

保育内容（健康）におけるねらいは以下のように示されている。

(1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。

(2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。

(3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。

また、幼稚園教育要領では内容は以下の10項目が示されている。

(1) 先生や友達と触れ合い、安定感を持って生活する。

(2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。

(3) 進んで戸外で遊ぶ。

(4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。

(5) 先生や友達と食べることを楽しむ。

(6) 健康な生活のリズムを身に付ける。

(7) 身の回りを清潔にし、衣類の着脱、食事、排泄など生活に必要な活動を自分でする。

(8) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しを持って行動する。

(9) 自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。

(10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。

保育者は保育内容（健康）について、これらの内容に従って子どもと一緒に活動したり、援助をしたりする。

保育者養成大学においては、この保育内容について総論から各論が幼稚園教諭免許および保育士証の必修の科目である。筆者が担当する保育内容（健康）については、2年次の

後期科目として設定されている。講義内容としては、先に述べたねらいと内容から、「運動遊び」、「食習慣」、「生活習慣」、そして、「安全対策・教育」の категорияにわけ、教授を行っている。さらに、講義の始めに「生命・健康の大切さ」をテーマにした学習を入れている。このテーマ学習は、それぞれの時間に「生命の誕生」、「生きる」、そして、「死」といった個別のテーマを設け、そのテーマについての学生の考え方や想いを共有していくものであり、情報機器の使用も取り入れた講義形式となっている。

そのテーマ学習の中で「生きる」のテーマにおいては、「NHK スペシャル こども・輝けいのち 15歳・拓（ひらく）の旅立ち～長野・義足のエースと仲間たち～」[NHK 厚生文化事業団, 2017] [NHK こどもプロジェクト, 2003] の視聴覚教材を用いた講義を行っている。この視聴覚教材は、6歳の時に交通事故により右脚の大腿部から切断した中学校3年生の三澤拓氏を中心として、その家族、野球部の同級生、後輩や顧問教師との関わり合いやパラリンピックを目指しスキーヤーとして歩み始める彼の1年間を追ったドキュメンタリー番組である。この内容からテーマである「生命」、「健康」、そして、「生きる」ということについて考えを深めることを目的として講義を行っている。

今回、保育内容（健康）における視聴覚教材の使用を中心とした情報機器を用いた講義展開について、受講生への質問紙調査や授業のリフレクションシートを中心に検討し、講義展開の有用性について考察したので報告する。

2. 方法

2.1 対象

対象は、A 大学短期大学部に在籍する幼稚園教諭免許および保育士証の取得を目指している専攻の学生 57 名である。対象の性別は、男性 5 名、女性 51 名、そして、不明 1 名であり、年齢は、 20.2 ± 2.97 歳（範囲 19-34 歳）

であった。

2.2 調査方法

調査は、保育内容（健康）の第2回目の講義時間にて実施された。講義の趣旨を説明した後、50分間の視聴覚教材の視聴を行った。用いた視聴覚教材は、「NHKスペシャル こども・輝け いのち 15歳・拓（ひらく）の旅立ち～長野・義足のエースと仲間たち～」

〔NHK 厚生文化事業団，2017〕である。その後、リフレクションシートの記入および自作式の質問紙調査への記入を行わせた。記入後リフレクションシートの記載内容についての発表を行い、感想の共有を図った。倫理的配慮については、講義中に文書および口頭による説明を行い、質問紙調査用紙の提出によって調査参加へ同意したものとみなした。

2.3 調査内容

質問紙調査について、自作式の調査用紙を用いた。調査項目については、15種類の動詞・形容詞の語句を用いて視聴覚教材を視聴して思ったことを、「5. とても思った」～「1. まったく思わなかった」の5件法の単一回答にて調査した（以下、動詞・形容詞調査とする）。また、12種類の名詞を用いて視聴覚教

材を視聴して考えたことを、「5. とても考えた」～「1. まったく考えなかった」の5件法の単一回答にて調査した（以下、名詞調査とする）。表1・2に調査した語句について示した。

表1. 設問内容①動詞・形容詞

明るい	おもしろい	カッコいい
悲しい	感動した	厳しい
共感した	元気が出た	すごい
楽しかった	ためになった	つまらない
辛い	優しい	勇気が出来た

表2. 設問内容②名詞

生きること	生命	健康
夢の実現	将来	幸福
人間関係	友達	家族（親）
学校の先生	障がい者	スポーツ

2.4 視聴覚教材の内容

視聴覚教材の内容について表3に示した。放送内容を18のチャプターに分類し、題名をつけ、それぞれのチャプターの内容について説明を加えた。ストーリーは中学3年生になった三澤拓と彼に関わる様々な人との交流を野球部の仲間や家族を中心に描いている。総時間は50分である。

表3. 視聴覚教材の内容の詳細

Chapter No.	題 名	説 明
1	三澤拓の紹介	三澤拓(以下、拓)の紹介。6歳のときに交通事故にて左脚大腿部から切断。しかし、そのころと身体は強靱で野球やスキー、そして水泳など様々なスポーツに挑戦してきた。「やれるかやれないかではなく、やるかやらないか、だと思ふ」は彼の言葉である。
2	野球部の友人	拓には小学校時代から共に野球をしてきた仲間が3人いる。一緒に野球をやろうと誘ったキャッチャーのR、ファーストのK、そして、サードのY。拓にとってこの3人と一緒に野球をやるのは中学3年の今年が最後である。
3	新学期～新顧問誕生 練習開始	新学期が始まる。野球部に新しい顧問の先生がやってくる。新顧問のもとで、中信大会を目指しての練習が始まった。
4	父親へのインタビュー	拓の父へのインタビュー。事故が起こったときの様子を詳細に語る。「(切断したことで)運動に関しては、もうなにもできなくなってしまった」と。
5	小学校時代の回想①水泳大会	小学校時代のVTR。水泳大会で拓は他を圧倒しての1位。
6	小学校の時の拓のインタビュー	小学校時代(10歳)の拓のインタビュー。I「勝てなかったら？」拓「また挑戦する。練習して」I「絶対やめないの？」拓「やめない」拓の意思の強さがよくわかるインタビュー映像である。
7	小学校時代の回想②野球がやりたい	小学校時代のVTR。自宅でテレビ視聴をしている時に「野球がやりたい」と。同級生Kの所属する野球チームへ入部することになる。
8	母親へのインタビュー	拓の母へのインタビュー。野球を始めたころや小学校の大会で特別表彰された時のことを話す。
9	練習試合 ストライクが入らない	地区大会前の練習試合。この日の拓は全くストライクが入らずに自滅。大敗を期してしまう。
10	地区大会の組み合わせ発表	地区大会の組み合わせが発表される。対戦相手は昨秋の大会で優勝しているO中学校である。O中学校に勝つことができれば、目標としている中信大会へ出場となる。
11	練習で	ある日の練習。大切な大会の間近だというのにチームの士気は一向に上がらない。主将である拓からチームメイトへの叱責がとぶ。「やる気ない奴はグラウンドに来るな。野球をやる資格がない。3年、あと2週間しかないのになんでやる気出せないのか。やる気ない奴は来るな。マジで」
12	最後の練習試合	地区大会までの最後の練習試合。この試合で地区大会のレギュラーメンバーが決まってくる。しかし、先発のマウンドは、拓ではなく、2年生のYとなり、拓は先発から外されてしまう。
13	野球部顧問へのインタビュー	顧問のY先生へのインタビュー。拓を先発から外したことについて。「限界が見えてきたのかな。それについてはうまく説明できないけれども、拓にはやろうと思ってできないことがあると思うんですよ。そういうジレンマも当然あると思うし・・・」
14	レギュラー・ベンチ入りの選考	地区大会のレギュラーとベンチ入りはチームメイトの投票によって決まる。拓はチームメイトの総意でエースナンバーである背番号1をつけることとなった。
15	地区大会1回戦	いよいよ中信大会を進出をかけたO中学校との対戦が始まる。試合前に拓は顧問より先発は2年生のYでいくと告げられる。拓はベンチでチームの応援をし、O中学校と一進一退の攻防を繰り広げ、勝利を手にし、念願だった中信大会への進出を決める。
16	中信大会へ～野球の終焉	中信大会に進出した拓たちは1回戦を2年生のYが投げ、勝ち、2回戦拓が先発するも、惜しくも敗けてしまう。これで拓の小学校から中学校までの約6年間の野球が終わりを告げた。
17	新たな挑戦 ～英語弁論大会～	秋。拓は新たな挑戦を始めていた。英語弁論大会への出場である。中学生の全日本英語弁論大会に出場した拓はこの夏に野球部で経験したことを中心に堂々と発表した。題名は「Dear Hamlet, I got the answer.(ハムレットよ、これが僕の答えだ)」である。「僕には夢がある。それはパラリンピック、そして、オリンピックで、片脚のスキーヤーとして競うことだ。僕は自分を信じ、周りの人たちの力も借りて、金メダルを勝ち取りたい。人の助けを受け入れることを忘れずに。それが、僕の得た答えだ」
18	世界へ 障害者スキーW杯出場	拓は障害者スキー連盟から「強化指定」を受け、W杯に出場することとなった。全日本の合宿や世界での試合を通して、新たな仲間や経験を、世界へ一歩一歩進んでいくことになる。

3. 結果

3.1 動詞・形容詞調査

動詞・形容詞調査の結果を表4に示した。

明るいについて、とてもそう思う 18 件 (31.6%)、まあそう思う 21 件 (36.8%)、どちらとも言えない 17 件 (29.8%)、あまりそう思わない 1 件 (1.8%)、まったくそう思わない 0 件 (0.0%) であった。

おもしろいについて、とてもそう思う 4 件 (7.0%)、まあそう思う 7 件 (12.3%)、どちらとも言えない 30 件 (52.6%)、あまりそう思わない 10 件 (17.5%)、まったくそう思わない 5 件 (8.8%)、未記入 1 件 (1.8%) であった。

かっこいいについて、とてもそう思う 27 件 (47.4%)、まあそう思う 18 件 (31.6%)、どちらとも言えない 7 件 (12.3%)、あまりそう思わない 4 件 (7.0%)、まったくそう思わない 0 件 (0.0%)、未記入 1 件 (1.8%) であった。

悲しいについて、とてもそう思う 3 件 (5.3%)、まあそう思う 5 件 (8.8%)、どちらとも言えない 20 件 (35.1%)、あまりそう思わない 24 件 (42.1%)、まったくそう思わない 5 件 (8.8%) であった。

感動したについて、とてもそう思う 27 件 (47.4%)、まあそう思う 23 件 (40.4%)、どちらとも言えない 5 件 (8.8%)、あまりそう思わない 2 件 (3.5%)、まったくそう思わない 0 件 (0.0%) であった。

厳しいについて、とてもそう思う 4 件 (7.0%)、まあそう思う 10 件 (17.5%)、どちらとも言えない 19 件 (33.3%)、あまりそう思わない 22 件 (38.6%)、まったくそう思わない 2 件 (3.5%) であった。

共感したについて、とてもそう思う 6 件 (10.5%)、まあそう思う 19 件 (33.3%)、どちらとも言えない 25 件 (43.9%)、あまりそう思わない 5 件 (8.8%)、まったくそう思わない 2 件 (3.5%) であった。

元気が出たについて、とてもそう思う 20

件 (35.1%)、まあそう思う 19 件 (33.3%)、どちらとも言えない 14 件 (24.6%)、あまりそう思わない 3 件 (5.3%)、まったくそう思わない 1 件 (1.8%) であった。

すごいについて、とてもそう思う 33 件 (57.9%)、まあそう思う 18 件 (31.6%)、どちらとも言えない 4 件 (7.0%)、あまりそう思わない 2 件 (3.5%)、まったくそう思わない 0 件 (0.0%) であった。

楽しくなったについて、とてもそう思う 5 件 (8.8%)、まあそう思う 10 件 (17.5%)、どちらとも言えない 29 件 (50.9%)、あまりそう思わない 6 件 (10.5%)、まったくそう思わない 7 件 (12.3%) であった。

ためになったについて、とてもそう思う 19 件 (33.3%)、まあそう思う 30 件 (52.6%)、どちらとも言えない 6 件 (10.5%)、あまりそう思わない 1 件 (1.8%)、まったくそう思わない 0 件 (0.0%)、未記入 1 件 (1.8%) であった。

つまらないについて、とてもそう思う 1 件 (1.8%)、まあそう思う 2 件 (3.5%)、どちらとも言えない 12 件 (21.2%)、あまりそう思わない 8 件 (14.0%)、まったくそう思わない 34 件 (59.6%) であった。

辛いについて、とてもそう思う 1 件 (1.8%)、まあそう思う 5 件 (8.8%)、どちらとも言えない 22 件 (38.6%)、あまりそう思わない 17 件 (29.8%)、まったくそう思わない 12 件 (21.1%) であった。

優しいについて、とてもそう思う 9 件 (15.8%)、まあそう思う 14 件 (24.6%)、どちらとも言えない 29 件 (50.9%)、あまりそう思わない 2 件 (3.5%)、まったくそう思わない 3 件 (5.3%) であった。

勇気が出来たについて、とてもそう思う 22 件 (38.6%)、まあそう思う 21 件 (36.8%)、どちらとも言えない 13 件 (22.8%)、あまりそう思わない 1 件 (1.8%)、まったくそう思わない 0 件 (0.0%) であった。

表4. 動詞・形容詞調査

	そう 思った	まあ 思った	どちらとも 言えない	あまり そう思わ なかった	まったく そう思わ なかった	未記入	合計
明るい	18 31.6%	21 36.8%	17 29.8%	1 1.8%	0 0.0%	0 0.0%	57 100.0%
おもしろい	4 7.0%	7 12.3%	30 52.6%	10 17.5%	5 8.8%	1 1.8%	57 100.0%
かっこいい	27 47.4%	18 31.6%	7 12.3%	4 7.0%	0 0.0%	1 1.8%	57 100.0%
悲しい	3 5.3%	5 8.8%	20 35.1%	24 42.1%	5 8.8%	0 0.0%	57 100.0%
感動した	27 47.4%	23 40.4%	5 8.8%	2 3.5%	0 0.0%	0 0.0%	57 100.0%
厳しい	4 7.0%	10 17.5%	19 33.3%	22 38.6%	2 3.5%	0 0.0%	57 100.0%
共感した	6 10.5%	19 33.3%	25 43.9%	5 8.8%	2 3.5%	0 0.0%	57 100.0%
元気が出た	20 35.1%	19 33.3%	14 24.6%	3 5.3%	1 1.8%	0 0.0%	57 100.0%
すごい	33 57.9%	18 31.6%	4 7.0%	2 3.5%	0 0.0%	0 0.0%	57 100.0%
楽しかった	5 8.8%	10 17.5%	29 50.9%	6 10.5%	7 12.3%	0 0.0%	57 100.0%
ためになった	19 33.3%	30 52.6%	6 10.5%	1 1.8%	0 0.0%	1 1.8%	57 100.0%
つまらない	1 1.8%	2 3.5%	12 21.1%	8 14.0%	34 59.6%	0 0.0%	57 100.0%
辛い	1 1.8%	5 8.8%	22 38.6%	17 29.8%	12 21.1%	0 0.0%	57 100.0%
優しい	9 15.8%	14 24.6%	29 50.9%	2 3.5%	3 5.3%	0 0.0%	57 100.0%
勇気が出来た	22 38.6%	21 36.8%	13 22.8%	1 1.8%	0 0.0%	0 0.0%	57 100.0%

3.2 名詞調査

名詞調査の結果を表5に示した。

生きることについて、とても考えた21件(36.8%)、まあ考えた28件(49.1%)、どちらとも言えない7件(12.3%)、あまり考えていない1件(1.8%)、まったく考えていない0件(0.0%)であった。

生命について、とても考えた21件(36.8%)、まあ考えた23件(40.4%)、どちらとも言えない11件(19.3%)、あまり考えていない2件(3.5%)、まったく考えていない0件(0.0%)であった。

健康について、とても考えた22件(38.6%)、

まあ考えた20件(35.1%)、どちらとも言えない11件(19.3%)、あまり考えていない4件(7.0%)、まったく考えていない0件(0.0%)であった。

夢の実現について、とても考えた27件(47.4%)、まあ考えた25件(43.9%)、どちらとも言えない4件(10.5%)、あまり考えていない1件(1.8%)、まったく考えていない0件(0.0%)であった。

将来について、とても考えた23件(40.4%)、まあ考えた25件(43.9%)、どちらとも言えない6件(10.5%)、あまり考えていない2件(3.5%)、まったく考えていない0件(0.0%)、

未記入 1 件 (1.8%) であった。

幸福について、とても考えた 13 件 (22.8%)、まあ考えた 21 件 (36.8%)、どちらとも言えない 20 件 (35.1%)、あまり考えていない 3 件 (5.3%)、まったく考えていない 0 件 (0.0%) であった。

人間関係について、とても考えた 26 件 (45.6%)、まあ考えた 17 件 (29.8%)、どちらとも言えない 12 件 (21.1%)、あまり考えていない 2 件 (3.5%)、まったく考えていない 0 件 (0.0%) であった。

友達について、とても考えた 27 件 (47.4%)、まあ考えた 19 件 (33.3%)、どちらとも言えない 9 件 (15.8%)、あまり考えていない 2 件 (3.5%)、まったく考えていない 0 件 (0.0%) であった。

家族 (親) について、とても考えた 28 件 (49.1%)、まあ考えた 19 件 (33.3%)、ど

ちとも言えない 8 件 (14.0%)、あまり考えていない 2 件 (3.5%)、まったく考えていない 0 件 (0.0%) であった。

学校の先生について、とても考えた 15 件 (26.3%)、まあ考えた 26 件 (45.6%)、どちらとも言えない 13 件 (22.8%)、あまり考えていない 3 件 (5.3%)、まったく考えていない 0 件 (0.0%) であった。

障がい者について、とても考えた 24 件 (42.1%)、まあ考えた 25 件 (43.9%)、どちらとも言えない 7 件 (12.3%)、あまり考えていない 0 件 (0.0%)、まったく考えていない 1 件 (1.8%) であった。

スポーツについて、とても考えた 16 件 (28.1%)、まあ考えた 20 件 (35.1%)、どちらとも言えない 13 件 (22.8%)、あまり考えていない 5 件 (8.8%)、まったく考えていない 3 件 (5.3%) であった。

表5. 名詞調査

	とても 考えた	まあ 考えた	どちらとも 言えない	あまり 考えてい ない	まったく 考えてい ない	未記入	合計
生きること	21 36.8%	28 49.1%	7 12.3%	1 1.8%	0 0.0%	0 0.0%	57 100.0%
生命	21 36.8%	23 40.4%	11 19.3%	2 3.5%	0 0.0%	0 0.0%	57 100.0%
健康	22 38.6%	20 35.1%	11 19.3%	4 7.0%	0 0.0%	0 0.0%	57 100.0%
夢の実現	27 47.4%	25 43.9%	4 7.0%	1 1.8%	0 0.0%	0 0.0%	57 100.0%
将来	23 40.4%	25 43.9%	6 10.5%	2 3.5%	0 0.0%	1 1.8%	57 100.0%
幸福	13 22.8%	21 36.8%	20 35.1%	3 5.3%	0 0.0%	0 0.0%	57 100.0%
人間関係	26 45.6%	17 29.8%	12 21.1%	2 3.5%	0 0.0%	0 0.0%	57 100.0%
友達	27 47.4%	19 33.3%	9 15.8%	2 3.5%	0 0.0%	0 0.0%	57 100.0%
家族(親)	28 49.1%	19 33.3%	8 14.0%	2 3.5%	0 0.0%	0 0.0%	57 100.0%
学校の先生	15 26.3%	26 45.6%	13 22.8%	3 5.3%	0 0.0%	0 0.0%	57 100.0%
障がい者	24 42.1%	25 43.9%	7 12.3%	0 0.0%	1 1.8%	0 0.0%	57 100.0%
スポーツ	16 28.1%	20 35.1%	13 22.8%	5 8.8%	3 5.3%	0 0.0%	57 100.0%

3.3 リフレクションシート

視聴覚教材を視聴してのリフレクションシートの結果を以下に示す。結果は、一部抜粋したものを原文掲載とし、下線部を筆者が追加した。

(1) どんなことにも挑戦し、決して自分だけ特別と考えず、みんなと同じように同じことをする拓さんの姿を見て何事も出来ないと思わず挑戦することは大切だと思った。

(2) 負けず嫌いでたくさんのスポーツに挑戦し、クラスの仲間たちと変わることなく同じように生活をしていて、特別扱いされないようにと何事にも諦めない心を常に持っている気持ちがすごいと思った。このビデオを観て何事も諦めずに前を見て進むことが大切だと学んだ。

(3) ついていけば勝てると思ってくれる友達やいろいろなことに挑戦させてくれる両親などのたくさんの支えがあり、拓君が野球をすること出来たと思ひ、私も支えていける存在になりたいと思う。

(4) いつも先生に言われ続けていますが、努力すればするほど結果がちゃんとついてくるんだと強く改めて思った。

(5) つい私はすぐに物事を諦めてしまうけどこの映像を見て、拓君を見習いたいと強く感じた。私自身をしっかりと理解して、全力で私の力を出せるような生活をしたい。

(6) 障がいを持った方がたくさん努力し、目標を達成するために頑張っていることが分かった。障がいを持つ子、大人の方の支えに少しでもなれたらいいと思う。そのために残りの時間を大切に過ごして、知識を身につけ支えられる人間、頼られる人間になろうと思う。

(7) 初めから出来ないと決めつけるのではなく、出来るまで頑張れるということが私にはないので、諦めるのではなく、最後までやり遂げることが大切だと思った。

(8) 拓さんは拓さんで頑張り、その頑張りを見てくれた人が拓さんの仲間になり、支えてくれて、本当の仲間ができたと思った。

(9) 信じて、信じられて、助けて、助けあって、努力することができる、挑戦することができる環境が大切だと思った。

(10) 今まで私は障がいのある方をみると、「かわいそう」と思ってしまったけれど、違ふと気づけた。障がいのある方も夢や目標を持って頑張っているからかわいそうではない。障がいがあるなしに関わらず、諦めなかったらどんな形であっても努力は報われると思う。

(11) 親のありがたみが分かった。聴力が弱く生まれてきたけど、人以上に愛情をくれ、大切に育ててくれた親には本当に感謝しようと思った。

4. 考察

筆者が担当している保育内容（健康）において、「生命・健康の大切さ」をテーマに3時間分の講義を行っている。それぞれの回で「誕生」「生きる」「死」という生命に関わる小テーマを設け、生命や健康について学生が主体的に考えるものである。主体的に考える際の教材として、それぞれの小テーマにあった視聴覚教材を準備した。その視聴覚教材を視聴した後、学生自らが考えや意見をまとめている。

テーマとした生命や健康については、個人によって程度の差はあるものの、普段の生活であまり考えることがないものである。しかし、この後保育者になっていく学生にとっては、多くの場合でこれらのことについて考えていく必要性が生じる可能性がある。そのため学生のうちに生命の大切さや健康について考えておくことは重要なことであると考えられる。

また、幼稚園教育要領[文部科学省, 2017]、保育所保育指針[大場, 2008]および幼保連携型認定こども園教育・保育要領[厚生労働省, 2017]の保育内容（健康）のねらいには、

(1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう、(2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする、そして、(3) 健康、安

全な生活に必要な習慣や態度を身に付けるといふ3点が挙げられている。乳幼児の生命や健康を守るといふことは保育者にとって最も重要な役割の1つであるが、その前に学生自身の生命観や健康観を形成することも必要になると考えられる。

これらのことからこの「生命と健康の大切さ」についてのテーマ学習は学生にとって、生命観や健康観を考える契機としても重要なものであると考えられる。木内らは、保育士の健康観について保育士5名を対象に半構造化面接を実施し、【健康な子ども観】【健康実践を支える自分自身の健康観】【健康実践を支える保育観】【子どもの健康に関する保護者との情報交換】【子どもの健康状況についての査定】【子どもの健康づくりのための保育実践】【子どもへの健康教育】という7つのカテゴリーを抽出したと報告した。さらに、保育士は、幼児の健康実践を支える中で、自分自身の健康観と保育観を実践の基盤としていると述べている。[木内, 2007]つまり、保育者にとって健康実践を行うためには自身の健康観を確立する必要性があり、その健康観によって健康実践への保育観にも影響を与えることがあると考えられる。

本研究における小テーマは「生きる」であった。視聴覚教材として選んだものは幼少期に大腿部切断をその後義足での生活となった少年が仲間と共に野球やさまざまな活動を行うというドキュメンタリーである。障がいがあるといふことは、「生きる」上でハンディキャップとなりうることであるが、このドキュメンタリーの主人公からはそんなことは微塵も感じさせない生命力がある。

本研究の1つめの結果である動詞・形容詞調査の結果からも「明るい」、「カッコいい」、「すごい」といふこの主人公の少年の生命力に共感するところで肯定的な意見が多くみられた。また、その感情を受けて、「感動した」「元気が出た」「ためになった」「勇気が出た」といった対象者自身に投影した言葉にも肯定的な意見が多くみられた。さらにリフレ

クションシートにおいての自由記述では、主人公の「挑戦する」に対して共感する感想が多くみられた。これらの結果は、主人公の行動がさまざまなことに挑戦していると捉えられたといふことであると考えられる。障がいのドキュメンタリーの一つの視点として、障がいがある中で「挑戦している」、「頑張っている」といふことがあるため、その感想はもつともである。しかし、その一方で挑戦という視点よりも主人公が周囲の助けを借りながら日常を過ごしているという視点こそが重要であると考えられる。つまり、これから先の人生をいかに生きるかといふことを考えた時、今回の主人公の出した答えの様に、「誰かの助けを借りながら、それぞれの目標に向かって生きていく」といふことを学ぶといふことが重要となるのではないだろうか。この視点を学生が自ら考えることが「生命の大切さや」を学ぶテーマ学習における「生きる」といふ小テーマについてより深く考察するために必要になってくると考える。

名詞調査の結果として、今回の学習のテーマである「生きること」や「生命」のことについては肯定的な意見が多かった。さらに、「夢の実現」、「将来について」も肯定的な意見が8割を超えていた。これらのことは、主人公の行動をみて、自分自身の夢や将来について改めて考えるきっかけとなったことが伺える。また、人間を対象とした設問においても、友達や家族（親）についてよく考えたといふ意見も多くみられる結果となった。WHOが定義する健康には社会的健康の概念が含まれている。社会的健康とは、周囲の環境のことであるが、その中に対人関係や自己実現も含まれる。今回の視聴覚教材においては、実にさまざまな人たちとの関わり合いや自己実現をしていく主人公の姿が映し出されている。つまり、健康的に「生きる」といふことは人と関わりながら、自己の将来や希望を叶えていく過程であるといふことができる。大森は、保育内容（健康）における健康について、定義を試み、「幸福感を感じられること」

と「どんな状況においても自分らしく生きることができる強さを持っていること」また「人間が願う最低限のものであり且つ最高のものでもある」の3点のキーワードが考えられたと述べている。[大森, 2017] これらのことから本調査の結果からも対象者は本講義を通じて生きるということについて肯定的に考えることができたかと推察される。以上のことから、視聴覚教材を用いた「生きる」をテーマにした本講義の展開は、保育内容（健康）において重要な自己の健康観について深く考察することが可能となり、保育者としての力量形成に寄与するものと考えられる。

5. まとめ

視聴覚教材を用いた「生きる」をテーマにした本講義を展開し、視聴後の質問紙調査およびリフレクションシートの結果から、保育内容（健康）では、「生きる」ということを肯定的に捉え、保育者としての健康観を深く考察し、それを健康実践の現場に応用していく力量を形成していく必要性があると考えられる。

引用文献

木内妙子, 王麗華, 園田あや他, 2007, 保育士の子どもの健康についての認識と健康づくりのための実践に関する研究, 群馬パース大学紀要 5, 641-651

公益社団法人日本 WHO 協会:

(<http://www.japan-who.or.jp/>) 2017年5月22日

厚生労働省:

(<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/law/kodomo3houan/pdf/seisyourei/h260430/c1-2-honbun.pdf>) 2017年5月22日

NHK こどもプロジェクト, 2003, 15歳・拓の挑戦—義足のエースと仲間たち—, NHK出版
大場幸男, 2008, 保育所保育指針ハンドブック, 学研

大森宏一, 2017, 保育内容（健康）における「健康」の定義について, 富山短期大学紀要, 52, 115-123

いしかわ たくじ

健康科学

ishikawat@suzuka-jc.ac.jp

A Study on Lecture Development Using Information Technology in Content of Childcare(Health)

Ishikawa Takuji

Key word

Child carer, Life, Concept of Health Audiovisual Teaching Materials

Abstract

【Purpose】 About the lecture development using information equipment mainly on the use of audiovisual teaching materials in nursery contents (health), mainly on question sheet survey to students and reflection sheets of classes, and on the usefulness of lecture development I will discuss it and report it. **【Method】** The subjects are 57 students majoring in acquisition of a kindergarten teacher license and childcare license. After watching the 50 minute audiovisual teaching material, the method let us write reflection sheet and self - made questionnaire survey. The questionnaire survey was made as a single answer of 5 methods.

【Results】 There were many positive opinions that the results of the verb · adjective survey were "bright", "cool", and "wow". Also, there were many positive opinions in words such as "I was impressed" "I was energetic" "It became beneficial" "I was able to do the courage". As a result of the noun survey, there were many positive opinions on "living" and "life". Furthermore, positive opinions about "realization of dreams" and "about the future" exceeded 80%. **【Conclusion】** The development of this lecture on the theme of "life" using audiovisual teaching materials makes it possible to deeply examine important self health views in childcare content (health), contributing to the formation of competence as a childcare person .